

《一》次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。(字数制限のある問題は、句読点も一字に数えます。)

高校野球をめぐる報道でしばしば繰り返されるのが「青春の燃焼」という観念である。曰く、「高校球児たちにはこの夏に完全燃焼してほしい」とか、「勝敗を超えた感動をありがとう」などといったフレーズが、それを象徴している。しかし冷静に考えてみれば、高校野球で完全燃焼する必要などまったくない。

私が所属していた大学野球部には、現役の後輩たちを熱心に支援するOBの方々が多くいる。そのうちの一人と話していたとき、その方は「大学野球は、高校で燃え尽きられなかった人が完全燃焼する機会にしてほしい」と語っていた。私は「それは違うんじゃないですか。燃え尽きずに続けられいいじゃないですか」と言った。自分が実際に成人の軟式野球チームで日々活動しているからだ、^①その大先輩の方はあまりピンと来ていないようだった。

野球は若い頃に完全燃焼して「やりきった」と思えるようになるのが素晴らしい、プロ野球選手や社会人野球選手にならなかったら、その後は自分ではプレーせず、「大人の男」として仕事に打ち込む。学生時代の野球仲間を見るかぎり、「野球部」出身者はこういう観念で人生を送りがちである。それは自分にとっても非常にわかる感覚で、なぜかという高校・大学野球はあまりに辛いことが多く、「野球」きついもの」という思い込みが形成されてしまうからだ。実際、私も大学野球を終えてからは「二度とやりたくない」と思っていた。

しかし、果たしてそれでいいのだろうか？ ふとしたきっかけで草野球界に飛び込んでみると、学生時代のようにイチイセンシン^Aはしていないが生活や仕事とそれなりに折り合いをつけながら楽しんでいる人や、はたまた仕事に打ち込みながらもさらなる高みを目指しトレーニングを続けている人、学生野球は経験していないながらも成人してから初心者として始めてメキメキと実力をつけている人など、いろいろな関わり方をしている人がいる。学生時代は強豪校でバリバリとプレーしてきたが、今は決して上手とはいえない仲間をサポートするという新たな関わり方をしている人もいる。

草野球経験のある人に共通するのは、学生時代の野球経験を「いい大学、いい会社」などの世俗的価値観に変換するというよりも、「野球をプレーする」という関わり方のなかで自らを変化・成長させているということである。これはアマチュアリズムの理想的な姿である。

もつとも、^②このような人々の存在はメディアで注目を集めることがないため、ほとんどの人は知ることがない。その価値を測るには複雑なものが見方が必要になるからである。既存のメディアは、受け手の受信力を過小評価している——より直接的には「侮っている」——ので、スポーツの価値を「数値」「実績」「売上」などのわかりやすいもので表象しようとしてしまう。

だが本来、スポーツの価値は実に複雑なものである。野球界にかぎっていえば、「高校野球＝青春の燃焼」という観念がここまで流布されてしまったことが問題だ。

そこで私が「ダイゲン^B」したいのは、「高校野球＝青春の燃焼」という観念に代わって、「高校野球＝豊かに人生を送れるように生涯にわたってスポーツに親しむための土台づくり」と定義しなおすことである。

高校野球＝土台づくりと考えるなら、無理なトレーニングや週6の練習に明け暮れて「汗と涙」で必死に勝利を目指すことは必ずしも必要ではない。高校生自身が^{※1}折衝をおこなって近隣校とリーグ戦を戦うことももちろんよい経験になるであろうし、高校生年代に適したトレーニングをどのように行うのかを考えたり、大会での勝利ではない多様な価値に気づくこともできる。それが、^{※2}高野連や朝日新聞が^③空念仏のごとく繰り返す「高校野球は教育の一環」という価値の、現実的な意味での実現につながるはずである。

また、このような現実をふまえたとき、^④日本社会の「青春観」にも大きな問題があると考えざるを得ない。「高校野球で燃え尽きることに青春」という価値観は、若い頃の時間を過剰に高く見積もっているため、成人になると「野球卒業後は仕事に打ち込む」という極端な考え方へと反転してしまう。仕事でうまくいかなかったら落ち込み、長時間労働で趣味の時間も持てない状況を加速してしまう。

「日本野球の父」安部磯雄は、^⑤スポーツは「レクリエーション」であると^Cいた。現代日本ではレクリエーションというと社員旅行での「ヨキヨウ」のようなものとして捉えられてしまうが、安部によればRe-Creationはすなわち「再創造」である。これは「気分転換」という意味も含む。

気分転換といっても「アンガイ^E」、軽んじられるものではない。普段の仕事や勉強、家事などから一度解放され、気分転換をし、リフレッシュしてふだんの生活に戻っていく、そのためにスポーツがある。気分転換は人間の生活にとって非常に重要——どころか、必要不可欠なものである。目に入る景色を変えたり、普段の生活でしない動きをすることによって創造性も再び高まっていく、それがスポーツの役割である。このことをもう一度、認識する必要がある。そういうRe-Creation(リ・クリエイション…再創造)のひとつの手段として、野球というものを捉え直したい。

(中野慧『文化系のための野球入門』より)

※1 折衝——問題を解決するために交渉をすること。また、その交渉。

※2 高野連や朝日新聞——「高野連」は日本高等学校野球連盟の略称。高野連と朝日新聞の共同主催によって、全国高等学校野球選手権大会、通称「夏の甲子園」が行われている。

問一 傍線部①「その大先輩の方はあまりピンと来ていないようだった」とありますが、何に対して「ピンと来ていないようだった」のですか。六十字以内で説明しなさい。

問二 傍線部②「このような人々」の例としてふさわしいものを、次のア～オの中から一つ選び、符号を書きなさい。

- ア 高校野球に打ち込んだ経験を就職活動で語り、体力をアピールする人。
- イ プロになった後にメジャーリーグで活躍し、様々な記録を叩き出す人。
- ウ いい会社で働くために、近隣の高校とのリーグ戦の折衝を経験する人。
- エ 大学野球を終え、就職してからは地域の同好会で気楽にプレーする人。
- オ 学生野球に注力した後で、社会人野球やプロ野球での活躍を目指す人。

問三 傍線部③「空念仏のごとく繰り返す」とありますが、「空念仏」という言葉には、批判の意図が込められています。筆者はどのような現状を批判しているのでしょうか。百二十字以内で説明しなさい。

問四 傍線部④「日本社会の『青春観』」とありますが、筆者の考える「日本社会の『青春観』」とはどのようなものですか。その説明として最も適切なものを、次のア～オの中から選び、符号を書きなさい。

- ア 競技に熱中できる高校時代はかけがえのないものであり、大人になってからは仕事に没頭することになっていくので、青春時代にこそ競技に全力を向けるべきだという片寄った考え方。
- イ 高校時代に燃え尽きることができなかった人は、その競技で燃え尽きるために大学に進学することになるが、それによりいい会社に勤めやすくなるという現実的な考え方。
- ウ 青春時代に打ち込んだ競技の試合を社会人になってから観戦するのは未練がましいと考え、その競技の国際大会が世間で話題になっても、仕事に明け暮れるという禁欲的な考え方。
- エ 青春時代を過剰に高く見積もって、自分が高校時代に打ち込んだ競技がこの上なく素晴らしいものだと思い、大人になってからも他の競技を見下すべきだという視野の狭い考え方。
- オ 高校時代に強豪校でバリバリとプレーすることによって、若い頃に競技を通して自らを変化・成長させることができた実感するところが青春の価値であるという古めかしい考え方。

問五 傍線部⑤「スポーツは『レクリエーション』である」とありますが、これはどういうことだと筆者は考えていますか。六十字以内でまとめなさい。

問六 本文の内容は「野球」だけではなく、様々なものにも当てはまると考えられます。本文が理想とするあり方を、「野球」から「学習」や「勉強」に置き換えたとき、そのあり方に最も近いものを、次のア～オの中から選び、符号を書きなさい。

- ア 小学校時代、中学受験のために一生懸命学習に取り組み、合格を勝ち取った。その後、意欲が薄れ、大学受験もまだ先のことからと思い、机に向かわなくなってしまう。しかし高校時代に勉強からの逃避で始めた創作活動が高じて、画家のマネージャーとして働くことになった。
- イ 元々学習は好きで、小学校六年生になってから中学受験することに決めた。合格後はテストの直前だけ机に向かい、それ以外は趣味の将棋を楽しんでいた。大学生になってからはアルバイトを頑張りながら毎日将棋でリフレッシュを続けていたところ、ついにアマチュアの将棋大会で優勝した。
- ウ 小学校の頃から、褒められるのが嬉しくて勉強をし、中学受験も乗り越えた。中学・高校・大学と自分なりに勉学に励み、社会人になっても休日に幅広く書籍を読んで見識を深めている。ある日、たまたま手に取った本で説明されていた内容が、仕事の問題を解決する一助となることに気づいた。
- エ 小学校時代から、身近なものと教科の内容を結びつけて学習し、中学受験を突破した。その後、多数の資格を取り、社会人になっても自分の評価を高めるために、仕事に関わる様々な資格を取り続けている。それを知った他の会社が引き抜きにやってきた際に折衝を繰り返し、今の倍の年収に落ち着いた。
- オ 小学校時代、中学受験のために一生懸命学習に励み、合格に至った。その後、さらに学習の意欲を燃やし勉強したが、大学に入ってから燃え尽きて勉強しなくなった。しかし、友達に勧められて株を買った会社が成長したことで大もうけができたので、今は働かず趣味に明け暮れている。

問七 二重傍線部 A～E のカタカナを漢字に直しなさい。

《二》次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。(字数制限のある問題は、句読点も一字に数えます。)

時は昭和三十三年。晴子は、川で溺れて意識を失ったが、次に目覚めたとき、晴子の中には令和七年の女子高校生、遙瑠の意識が乗り移っていた。いま、晴子はもとの晴子ではなく、遙瑠が晴子の身体を借りて生きている。遙瑠が生活していた地域は晴子とほぼ同じ地域である。周囲の人々は、晴子に未来からきた別人が乗り移っているとは思っていない。

晴子、紗代、恵美子は高校の演劇部員である。今回の劇のテーマを決めるとき、はじめ、恵美子は戦争劇をするのに難色を示していた。そんな中、進水式のお祝いの餅まきに参加した帰り道に、恵美子は、自分の家を晴子と紗代に見に来てほしいと言う。

「でもね、私の中では、どうしても納得できないことがあるの。言葉にするよりも、今からうちにきてそれを見てもらおうと思う」
恵美子が戦争をテーマにするのを拒否する理由が、恵美子の暮らしの中にあるというのだろうか。

それ以上は私も紗代も、突き詰めて聞けなかった。
たつ屋さんでお昼ご飯をすませると、私たちは恵美子のあとについて自転車走らせた。
有修小学校の前を抜け、八間道路を渡る。このあたりは船江というところで、大きな紡績工場の煙突がそびえていた。令和の時代にその姿はなく、スーパーマーケットやホームセンターに変わっている。

紡績工場を中心にグラウンドや小さな商店や病院まであり、ひとつの町のような様子だ。脇道には、長屋造りの棟が玄関をこちらに向け、延々と続いていた。家々が背中合わせに建てられているようで、細い通りの向こう側にも、同じ顔をした家の玄関があるようだった。突き当たりをぐるりとまわりこむと日陰になっていて、こちらの通りは雰囲気も暗かった。

十軒ほど通りすぎたところで、恵美子が自転車をとめた。メンコや鬼ごっこをしていた子どもたちが、珍しそうに私たちを見ている。鼻をたれた子やパンツ一枚の子もいた。全身から貧しさと生命力を吐き出しているようだ。

家も心も傾いているように見えた。湿気が多いせいで、シダやドクダミがあちらこちらから顔を出している。家と家の隙間から、蟹が赤い爪をちらつかせる。

「日当たりが悪いから。でもこっち側の方が家賃が安いんだ」

私たちが気後れしているのがわかったのだろう。恵美子はつとめて明るい声を出す。

「まああがって、とも言えない家だけど、見てって。友だちを連れてくるの、生まれてはじめてなんだ」

立て付けの悪い木の戸が、ががごとどこかにつかえながら開いた。家の上がり口の幅は五十センチもなく、すぐに部屋になっていた。一歩足を踏み入れたとたん、お酒の醗えた臭いがした。その部屋には小さな台所が外に面して付いていて、すみには父親らしき男が壁のシミのように座り込んでいた。トロンと黄色く濁った目で紗代を見てまたすぐにその目を閉じた。手にしたコップは空で、微かにふるえていた。お風呂はもちろん、トイレさえも見あたらない。次の間はあつたけど、すぐ先に、洗濯物を干すだけのせまい庭が迫っていた。

畳の上の布団の山が動いたかと思ったら、女の人が顔を出し、崩れた化粧のままこっちを見た。

「恵美子、誰え？ 市役所の人？ 税金は払えないって言っというて」

しゃがれた声をする。

「違うよ、お母さん。友だちだよ」

「③なんでそんなの連れてくるんだよ」

恵美子が答えると、女性はたちまち不機嫌になった。

「こんなボロ家。お茶も出せないのに、友だちに逃げられたらどうするんだ」

「そんな友だちじゃないから。親友だから、安心して。公園に行ってくるから、お母さんは寝ていいよ。そうだ、今日は進水式で、お餅拾ってきたんだ。台所に置いとくね」

「そりやいいね。これで一週間もつね」

このときだけは嬉しそうな顔になった。

お母さんが言ったのは、嘘でもないのだろう。台所にも、部屋の中にも、生活最低限のものですら欠けているようだった。

「ちっ、あそこの餅は水っぽくていけねえ」

ぼんやりと眠っていたかと思ったら、父親が目を開けていた。

三人で外に出て、公園まで歩いた。向こうに紡績工場の広いグラウンドが見えた。公園は子どもたちで溢れ、野球やゴム跳びをしていた。家の中では遊ぶスペースもないのだろう。

薄紫色の膨らみかけた紫陽花の前に、私たちは座った。

「お父さん、和菓子屋の息子だったんだ。戦争に行くまでは、腕のいい和菓子職人で、ゆくゆくはお母さんとお店を継ぐつもりだった。それが戦争で何もかも失った。戦争中は、示せ貯蓄の底力とかで、※1 報国債券をいっぱい買わされて、戦争が終わったたらただ同然の紙きれに。家は空襲で焼けるし、戦争から帰ってきたお父さんは、すっかりおかしくなっちゃって働こうとしないし。お酒を飲んで眠って、また起きてお酒を飲んで。毎日がその繰り返し。でも時々思い出したように、私たちに謝るんだ。迷惑かけてすまない、生きていてすまないって。謝るけど働けない。」

お母さんは、よほど戦争でいやなことがあったんだよって、お父さんを庇うんだ。そのうちによくなくなるからって。でもどんどん悪くなるばかり。入院させたくても、お金がかかるって病院へも行かないし、どうしようもないんだ」

「じゃあ、どうやって……その、お母さんも寝てたし」

布団から出てこようとしてもしない母親を思い出す。正直あの態度には腹が立った。

「日曜日はいつもあんな感じで寝てる。ずっと働いて疲れてるから。普段昼間はそこの紡績工場で働いて、夜は……※2 キャバレーで働いてる。さつき造船所の事務員さんが話してたのと同じだよ。あの人は被害者面してたけど、私に言わせればうまいことのし上がった口だよ。何が紙一重だよ。うちのお母さんはもうどうぶつふりそっちの世界へ浸かってる。でも、そのおかげで私は高校へ行かせてもらってるんだけどね」

きつとつらいことなんだろうけど、恵美子は何でもないことのように話す。私はやりきれない気持ちになった。伊勢には伊勢神宮のおかげで、和菓子屋さんがたくさんある。戦争さえなければ、恵美子のお父さんは今頃和菓子屋さんの主人で、恵美子はお嬢さんだったはず。日曜日には、着物など着てお店の看板娘になっていただろう。

しかしそれもすべては、戦争がなければという、仮定の話だ。戦争がすべてを焼き尽くし、奪い、人間の魂さえも変えた。

「そっか。それで恵美子は東京へ行つて、一旗揚げたいんだね。両親のためにも」

こんな境遇でも、恵美子がまだ人生をあきらめていないことが唯一の救いだし、私には嬉しかった。

「それで、東京へ行つて、ちゃんとしたあてはあるの?」

私は心配で聞いた。

「お母さんのお客さんで、東京で映画の助監督をしている人がいるの。ちゃんとした人だよ。その人の娘さんも、女優の卵で、時々手紙のやり取りをしている。東京へも一度だけ遊びに行つて、おうちにも泊めてもらったけど、とてもいい感じの家族だった。高校を卒業したら、まずはそのうちに※3 居候しながら、娘さんと演技の勉強をする」

恵美子の明るい顔を見て、さつき見たお父さんたちの映像は消えかかっていた。

「何もできないけど、応援するね」

紗代が言うと、

「だから、何もなくていいから、私の映画を観に来て」と、恵美子は強気だ。

「そうだ。黒宮さんに頼めば、東京で働き口とか住むところを探してくれるよ。黒宮さんなら絶対信用できる」

すると、紗代が話の先を奪う。

「晴子。絶対って言葉は、絶対に使っちゃいけないって、深見先生が言つた。絶対の沼にはまってしまうと、もう抜け出せない。絶対に戦争でしか解決できないという思いが、常識になってしまふんだって。戦争には絶対に勝てると思ひこんで、そのうちに、絶対に負けるわけにはいかなくなって、一億玉碎つてことになつちゃう。そこにあるのは、国家ではなくて、洗脳された思想集団だって」

いかにも深見先生が言いそうだ。

「でも、スタアになるには、ファンに対して洗脳的な空気を醸し出すのも必要でしょ」

「確かにそうかも」と、恵美子が私の意見に賛成した。

「とにかくこれで、私は吹っ切れたから。紗代と晴子と三人で、最高の戦争演劇にしてみせるよ」

恵美子が晴れやかに言つたとき、私はふとこわくなった。このまま演劇のテーマが戦争ということになったとき、私はこの二人についているのだろうか。私は戦争を知らなすぎるし、あたりまえだけど、周囲に戦争体験がある人もいなかった。もつと戦争のことを知らなければ。いや知りたい。戦争が常識になつてしまう世界とは、どういう世界なのだろうか。これだけの悲劇を残しておいて、まだ人々が平静を装って暮らしている戦争とは、いったい何なのだろう。

私が前にいた時代も、世界のあちこちで戦争が勃発して、戦争が常識になりつつあった。日本は議論を戦わせることなく、武器の輸出が可能になった。あの国が悪いこの国が悪いと言いながら、結局自分たちの国はどうするべきなのか、国会で議論されなかった。「戦争もアリかもね」という空気が、アメリカが守ってくれるという神話の隙間から流れ出していた。

戦争が身近な、それでいて得体のしれない未知の生き物のように思えてきた。

(村上しいこ『海は忘れない』より)

※1 報国債券——戦時中の資金調達などのために国家が国民からお金を借り集めて引き換えに発行された券。本来ならば一定の月日のあとお金は戻るが、

敗戦でその仕組みが失われて券の値打ちはほぼ無くなった。

※2 キャバレー——酒を出す店。

※3 居候——他人の家に住んで養ってもらふこと。

問一 二重傍線部 A、C の言葉の意味として最も適切なものをそれぞれ選び、符号を書きなさい。

A 心もち				B 憶えた				C 次の間			
ア	土台から	イ	ほんの少し	ア	出来立ての	イ	強烈な	ア	主要な部屋に隣接した部屋	イ	いったん地面におりられるところ
ウ	揺れながら	エ	芯を保って	ウ	甘い	ウ	焦げた	ウ	しばらく観察するための時間	エ	家と家とをへだてる隙間
オ	見る人によつては	オ	すっぱい	オ	すっぱい	オ	風呂などの代わりにできるもの	オ	風呂などの代わりにできるもの		

問二 傍線部①「父親らしき男」、②「お母さん」とありますが、恵美子の父親と母親に関する説明として正しいものを、次のア、ウの中から二つ選び、符号を書きなさい。

- ア 父親は和菓子職人としての感性を根こそぎ失ってしまい、母親はそれを戦争の影響だとして庇っている。
- イ 父親はまるで人が変わってしまった、仕事をしようともせず、母親は働けるかぎりは昼夜を問わず働き続けている。
- ウ 父親には恵美子の友だちの気持ちを汲む力はなく、母親には恵美子の友だちの抱く感情まで正確に汲み取る力がある。
- エ 父親は酒癖が悪く、戦争から帰ってきてからというもののキャバレーに入りびたつて浪費ばかりしている。
- オ 父親と母親は、家計を切り詰めるために、恵美子を手伝ってもともと住んでいた家を引き払って今のボロ家に引っ越した。
- カ 母親は休みの日には疲れ果てて寝ており、身なりを整えることもせず、少しのことでは布団から出ることもない。
- キ 恵美子は母親を扱いづらく感じており、そっけなく返事することでもかろうじて母親の言葉をやり過している。
- ク 母親は恵美子を持ってきた餅をありがたがり、いささか機嫌を直したが、父親はもうなら酒がよかったと不機嫌になった。

問三 傍線部③「なんでそんなの連れてくるんだよ」とは、恵美子の母がどのように感じて発した言葉ですか。六十文字以内で説明しなさい。

問四 傍線部④「じゃあ、どうやって」の後に続く言葉を考えて記しなさい。

問五 傍線部⑤「何が紙一重だよ」とありますが、「紙一重」という言葉を正しく使い、かつ、「造船所の事務員さんが話してた」内容を予想しているものを、次のア、ウの中から一つ選び、符号を書きなさい。

- ア 敗戦後やつと人々の心に紙一重の気力が湧いて、船で敵国に乗り込む機運を生んだのだ。
- イ 戦争で何もかもを壊された恨みは、紙一重の言葉ではとても書き残せないものなのだ。
- ウ あなたの家も、もうあと紙一重だけ丈夫に建てていけば、損害を逃れられたはずだ。
- エ 昼夜働きづめの苦しい生活から抜け出せない人と抜け出せた人との差は、紙一重だ。
- オ 今こそ日本国民が紙一重に団結して、敵国を倒しに行かねばならないのだ。

問六 傍線部⑥「絶対って言葉は、絶対に使っちゃいけない」とありますが、これはなぜですか。解答欄の「絶対という言葉を使うと、」に続けて二十文字以内で書きなさい。

問七 傍線部⑦「とにかくこれで、私は吹っ切れた」とありますが、このように言う恵美子の心の中を、本文全体の内容をふまえて、百三十文字以内で説明しなさい。

問八 傍線部⑧「戦争が身近な、それでいて得体のしれない未知の生き物のように思えてきた」とありますが、このとき晴子の身体を借りて生きている遙瑠の心情を説明したものととして最も適切なものを、次のア～オの中から選び、符号を書きなさい。

ア 令和七年に生きていた自分にとって戦争はもはや過去のものであり、戦争を論じるには若すぎて、どこか遠い世界のことと思っていた。しかし自分が強制的に昭和三十三年に放り込まれてみて、同世代の若者に巻き込まれながら、自分もしっかりとした考えが持てるようになった。あらためて日常の経験の大切さを評価すると同時に、自分の考え方の変化がなんだか怖い。

イ 昭和三十三年の日本はまだ物も心も貧しいままで、戦争から立ち直りできていない。令和七年の日本を知っている自分の立場で考えると、当時の苦しみは科学技術が全く進歩していなかったことが原因であり、豊かさを取り戻すには科学の進歩を待たなくてはならないが、完全に科学の進歩を果たしたはずの令和七年の世界でも戦争をなくせていないというのは皮肉に感じられる。

ウ 自分は令和七年の世界にいたから戦争を知らなかったが、昭和三十三年に遡ると戦争の傷跡が生々しく、当時の人々は悲劇を乗り越えて生きること強いられていたと知った。一方、令和七年も戦争が世界中で相変わらず起き続け、日本でも物事の解決手段として戦争への抵抗が薄れているようだ。戦争は年月を経ても厄介な形で人間界にはびこり続けていることに気付き、気味が悪い。

エ 令和七年でも世界のどこかでまだ戦争が続いているというのは、昭和三十三年に日本が経験した貧しさを世界のどこかが入れ替わりで後追いつているということだ。そんなことではいつまで経っても戦争がなくならない。昭和三十三年の暮らしを体験した自分こそ、戦争を我が身と重ねて考え、悪循環を断ち切ることができるように活動するべきだと意識が高まっている。

オ 令和七年に生きていた自分が、昭和三十三年の同年代の人々と戦争劇に加わろうとしていることをあらためて考えてみると、七十年近く経過しても自分の血肉に戦争の感覚が深く刻み込まれて生きていたということに気づいた。また、振り返ると自分が過ごしていた令和七年の日本国内も戦争に寛容な雰囲気であったことに、あらためて嫌悪感を覚えている。

〈四十点〉

《三》次の①～⑮の傍線部のカタカナを漢字に直しなさい。

- ① ウチュウ人は存在するかもしれない。
- ② 幹から染み出たジュエキに昆虫が群がっている。
- ③ 寮と学校をオウフクしても二分しかかからない。
- ④ 商品をカクシユ豊富に取りそろえております。
- ⑤ リモコンのデンチを交換する。
- ⑥ レイセツを欠いたふるまいをたしなめる。
- ⑦ 師匠が弟子に教えをタれる。
- ⑧ 同じミスをしたくないよう、ゼンシヨいたします。
- ⑨ 監督が選手にインドウを渡し、現役続行をあきらめさせた。
- ⑩ オウボウな態度に困り果てる。
- ⑪ メンミツな計画を立てる。
- ⑫ ミサイルのシャテイ範囲から外れた。
- ⑬ ずさんな計画にはショウフクしかねる。
- ⑭ このままではソウバン行き詰まるような気がする。
- ⑮ 歴史に関するチヨジユツを多く残す。

〈十五点〉